

年表で読む

古平の歴史

揚子下中殿

断章小説「ふるさと遙か」 第25編

北一条の詩

吉川 義雄

「ナニツ、胸をやられたつて。」
「そうなんです。入院することになりました。」
「ワヤだなア……」

声にならない思いで、山田は友の顔をみつめた。

敗戦。生き抜いて故郷に帰って、少しはのんびりしようと思つて、少した彼を、ふるさとは遊ばせなかつた。就職した職場に、何でも話せて少しセンチな文学青年、皆川唯志がいた。山田の後輩に当たる彼は、待ち望んでいた人が来てくれたと言わんばかりの歓待ぶり、自分と心の通い合う友達を次々と連れて来ては山田に紹介した。

そんな中に桐野京子がいた。微笑を絶やさない美しい顔の人で、いつ会っても静かで、言葉を選ぶとき必ず皆川の方に顔を向け、確かめるようにしてから

話しを続けた。

彼らが相思の仲で、間もなく結婚することになっていることも、山田はすぐに知った。

結核は不治の病。うわさに聞くペニシリンもマイシンも遙かに遠い国のもの、万の金が無くては手に入らぬ夢の特効薬であった。京子の家から婚約破棄の通告を受けた直後、皆川は札幌の病院に失意の体を横たえて涙を枯らした。

京子も、いたたまれぬ故郷を離れて、小樽の姉の許に苦悩の身を寄せた。

微笑を忘れた彼女の札幌往復が、いったい幾度繰り返されたのやら。

山田の許に、病窓からの便りが次々に舞い込んで来た。そして、冬が近づくころ、皆川は彼の敬愛する山田が見守る前で、

静かに若い人生を終わらせた。五十年近い歳月が瞬く間に去った日、山田の詩稿の厚い底から、皆川の去ったところに書いたと思われる歌稿が出て来た。

北一条 哀歌

一、「五月の風はまだつめたくて、リラは蕾をひらきません」

君の便りの この道は肩を寄せ合い ふたりして春を知らせる 鐘の音を

静かに聞いた 北一条

二、「病窓からから夏が入ってきます。死ぬのはこわい

このごろいす」アカシヤの咲く この道は匂う若さの 君を抱き

呼べば応えた 青春の涙で霞む 北一条

三、「夜は声なく、小雪が舞つて、悲しみ続く、灯が滲みます」

独りたどれば 道はるか幸せうすい 君に哭き

どこまで行けば 消えるのかさびしく続く 北一条

「人は、青春の想い出に生きるものである。」山田が戦争に行く前、フランス映画の『格子なき牢獄』で、主役の主人公がスクリーンの中で叫んだ言葉であるが、以来、彼はこの言葉を永く忘れることはなかった。

人は生涯人を愛し、人に恋され、人に尽くし、人に慈しまれて、その生を終えるものらしい。この道を一路と信じて、悲しみはつきまとう。ましてや憎しみや、恨みのはざままで道草をしている人生に、悲哀の絶えることなどないだろう。

人生に、いのちの美しいいのちの想い出はずしりと重い。そして美しく尊く、輝きを増して消え去ることなどない。

詩稿の中に、皆川の入院した北海病院前の北一条通りの詩が幾編も出てきた。

アカシヤ白い 花房がやさしく薫る 北一条

木洩れ陽歩む 女がひとりあの日誓った わたしの道を

空の青さが まぶしくひかる終止符のような詩も出てきた。

△この稿終わり▽

芝石き特攻隊員の

辞世の句に接して

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

ここ富山では、毎月の第一日

曜日に「青空のみの市」が開かれ、会場となっている護国神社の境内には、各地から集まった業者やフリーマーケットが所狭しと店を並べ、掘り出し物や割安ものを求めるお客で賑わっています。

古美術や骨董とは無縁の私ですが、目の保養と、値段をたいて買い求めるお客と店主との掛け引きが面白く、毎日出かけております。

今まで何十回となく通い続けていたのですが、昨年の秋に境内の片隅に「遺芳館」があることを初めて知り、何気なく立ち止まったのですが、誰かが私を招き、誰かから背中を押されたような気持ちにひかれ中に入っ

てみました。

建物の中には、白木の句いが漂い、戦没者の遺品や写真が展示され、その多くは下級兵士のものでした。戦争を知る私は、当時の世相を偲びながら、食い入るように観ていたのですが、陸軍少年飛行学校を終えた十九才の特攻隊員が突撃の直前に謳った辞世に心を打たれました。

それは、当時の私とあまりにも似ていたからです。

すすんで少年滑空訓練所に入所し、グライダーによる飛行訓練を体験した後、海軍航空兵に合格し、軍需工場で働きながら召集の知らせを待っていた私の姿と、辞世の少年とが重なって見えたのです。

魂を奪い、思想を奪い、自由

を奪い、更に「命」までも奪う

など「聖戦」の美名のもとに軍国主義が謳歌され、教育と報道が国民への伝導を担い、国民を戦争一色に駆りたて、私も何の疑問もなく盲従したのです。

若しも戦争がもう少し続いていたら、私も辞世を残した十九才の青年と同じ運命を辿ったに違いありません。

「すべてお国の為」

と信じ、何のためらいもなく殉死した純な心と、この辞世を手にしたご両親の心情に思いを馳せた時、胸が締めつけられ、全身の血が引き、身震いと共に止めどなく涙が流れてきました。

まわりの方に気付かれぬように手を合わせ、嗚咽していた私に係の方がそとと寄ってきて

「お遺族の方ですか」

と尋ねられました。私は「十九才の青年の辞世に合掌していました」

と言うと

「お遺族の方は、今も足しげくお参りされ、遺品に語りかけておられます。これからも遺霊をお慰めに来て下さい」と、穏やかな眼差しで語ってく

れました。

位叶世

特別攻撃隊員 十九才

昭和二十年五月十三日

父上様へ

海山に 劣らぬ親の厚恩に

今ぞ報へん 國の為散る

母上様へ

夢にだに 忘れぬ母の涙をば

いだきて三途の 橋を渡らむ

弟へ

國の為

散りにし兄をしのびては

頼むぞ後の 家のほまれを

各地には、戦没者を祀った神社や石碑があります。

一点の疑心もなければ心の曇りもなく、只々純白な心で、たった一つの尊い「命」をも捧げてしまった多くの人々が、静かに眠っているのです。

あの頃を賛美するのは誤りです。賛美しないで下さい。

でも、拝まなくとも合掌しなくともいいですから、今日の平和の陰に、こうした犠牲者がいたことを心の片隅に刻んでいて欲しいと思います。

——古平いろはうた——

鰐口と打ってお詣り恵比須さん

古平町内には、漁業の町だけあって恵比須神社というのはいくつかあり、港町の厳島神社をはじめは恵比須神社でした。ここでいう恵比須神社は現在の沖町の恵比須神社のこと、そこには大変貴重な文化財ともいえる『鰐口』という祭事用具があります。

松前藩時代、藩士への給与の代わりに貸し付けられた古平場所を請け負い、その後の古平の発展にも寄与したとされる、本拠を現在の滋賀県近江八幡市に置く岡田家の支配人が、今から一五〇年前の嘉永五年に恵比須神社を創建しました。祭神として事代主命(ことしろぬしのみこと)・保食命(ほくしょくのみこと)を祀りました。

明治政府の郷村社制により村社という社格が与えられましたが、明治四三年、郷社琴平神社に合祀になりました。

神社をはじめセタカムイ岬の沿道沿いに建てられました、社殿が落石や大波による被害があり、その後、余市山道入口付近に移設されましたが、昭和二七年の台風で倒壊したため、さらに旧沖小学校跡地に移築されました。例祭は琴平神社と同じ七月十日ですが、ニシン豊漁のころは沖村村内を渡御したこともあったといえます。

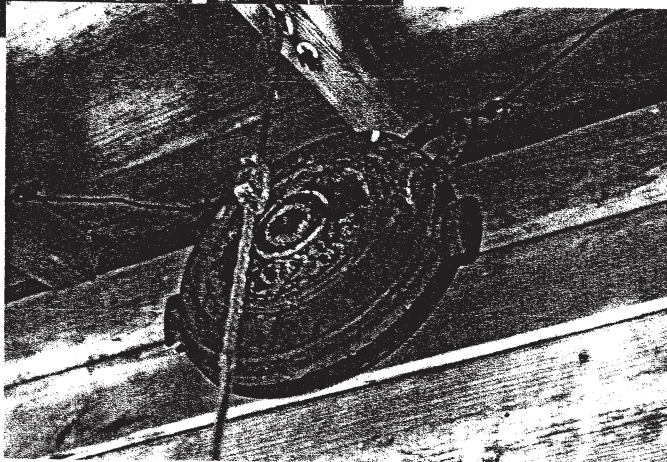
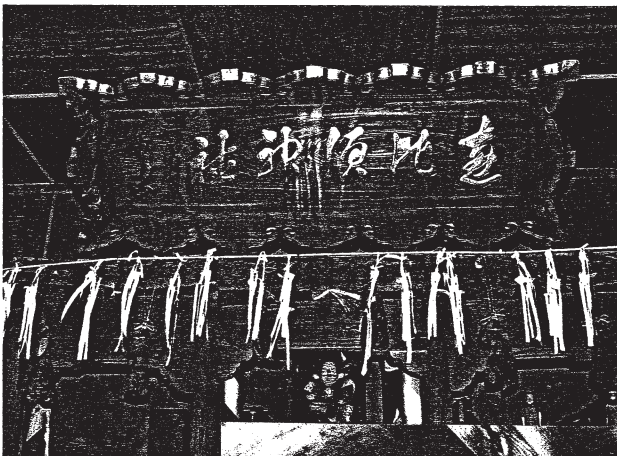
祭壇の上に掲げてある額は、札幌神社藤田宮司の書です。さて、恵比須神社の軒下に下がっている『鰐口』ですが、写真で見るとおり扁平、中空で、下に口が開いています。銅で出来ていますが、角型の銅をつけたひもを振り動かして、それで打ち鳴らすのです。神社などへ参拝のとき鈴を振って鳴らすのと同じです。

古い時代から使われていて、

大きさも二十センチから大きいものでは二メートルもあり、初めは人を集めるときに打ち鳴らしたそう、で、当時は金鼓(きこ)と言われていました。

僧侶が布教のときや、お寺で台に取りつけて打ち鳴らす仏具も同じく鰐口と言っています。今では、お寺の軒下に下げて使っている『鰐口』を見かけるようなことは、まずないでしょう。それほど現在では貴重な品物です。

大分以前のことですが、泥の木の熊野神社で、太鼓が盗難にあったとのことです。この『鰐口』、盗難に遭っては大変と、現在は取り外して保管されています。



↑ →
軒下に下がっていた鰐口
藤田宮司の筆になる恵比
須神社の掲額

波の音に思うこと



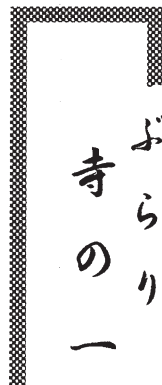
竹内コト

浜育ちの私は、静かな海、ときには荒れ狂う海、そのときどきの海の表情をいろいろと見てきました。でも、悲しい事故のあったことを思い出すと、海を見ていて寂しさに耐えられない気がします。

ある時化の日のことです。浜で大勢が集まってわいわい騒いでいるのです。その日は波が高かったのですが、なんでも、古平からリングを積んで余市方面へ向かった川崎船が、沖合いで遭難し、その死体が岸に打ち寄せられたのです。積んでいたリングが、辺りの浜一面に散乱していました。その時は大変な騒ぎで、今でもあの痛ましい光景が目に残っています。

また、ある夏のことでした。男の子ばかりで泳いでいるうちに仲間の一人がいけないのに気が付き、子どもたちが「勝也がいな

い」と、騒ぎ出したのです。もちろん家にも戻っていないというのです。もしや溺れたのではないかと、大勢で探し回りました。何時間か経ってから、舟で探していた川畑さんのじいさん



ぶらり 寺の一人旅

室谷忠雄

私の好きな寺のひとつに高台寺という寺があります。

京都にある小さな寺で、豊臣秀吉の夫人北の政所(きよまんどう)ねねが、秀吉の菩提を弔うために創建した寺なのですが、ねねが七六歳で没するまでこの寺に住んでいたそうです。

本堂の臥龍廊(りゅうどう)という石段を一五〇メートルほど登って行

が、「ここにいたぞうつ」と叫びました。すると近くにいた勝也ちゃんの母さんが、着物を着たまま海に入って行ったのです。間もなく引き上げられ、浜で人工呼吸をしてくれた人もいましたが、みんなが見守る中で息が絶えたようでした。勝也ちゃんはその時確か五、六歳でなかったかと思います。

子どもたちが海で遊んでいて事故に遭うなんてことは、本当に珍しいことでした。今の海岸は防波堤も高く、近くの海岸には浅瀬も無くなり、子どもたちが浜へ出て遊ぶことも余り見かけなくなってしまうました。



子どもたちが海で遊んでいて事故に遭うなんてことは、本当に

とやわらかい雰囲気があつて、気持ちの落ち着く寺です。拝観する者をやさしく迎えてくれる私の好きな寺です。桃山文化にふれるのであれば、ぜひ拝観しておきたい寺のひとつでもあります。

くと霊屋があり、内陣には秀吉とねねの像が随求菩薩(ずいきぼさつ)を中心、左右に並んで祀られております。向かって右側が秀吉、左にねねの像があり、ねねは右膝を立てたインドの礼法に従って座っています。

この寺はねねという女性が創建した寺のせいか、国宝などはありませんが、何となく優しさ

寺の門を出て、南に向かって維新の道を横切り、八坂の塔を右に見ながら二年坂、三年坂を登り、突き当たりが清水坂です。その坂を左に登って行くと清水寺の仁王門に出ます。

古い門前町をのんびり歩くのも、寺巡りの楽しみのひとつでもあります。

大正八年

7/24

一カ月ぶりに雨が降り、これで草木も生き返るだろう、しかし、通り雨のようので二時間ほどで晴れた、白米一俵二二円、白砂糖一斤八〇銭、実にひどい世の中になった、土地の交換なども終わって浜町では道路の整備が進んでいる。

7/25

暑さが厳しく、夜も蒸し暑いのでトミをおぶって外に出る、新開町方面へ行く、大黒屋、東京屋、ビヤホールなど灯りが沢山ついていて賑やかだ、トミと氷水を飲む、一杯十銭だ。

7/27

各地とも雨不足で困っているようだが、昨夜から今朝にかけて大雨が降る、畑作には何よりの雨だ、綿糸が相変わず値上がりで、昨年の今頃のちょうど五割高だ。

7/29

港町の石田、堀、大谷さんの三人が来て、カレ網と附属を入れて二千円からの注文があった、早速、東洋漁網へ照会する。

7/31

掛け金が割によく

入る、店は月末で忙しい、小樽から横田リング屋が来て十四号と五八号を売ってくれという、余市を始め各地が不作とのこと、このところ多くの買受人が来る。

8/1

昨日からの雨は一晩中大降り、仮家にいると大変だ、土場方面ではまた水がついたとか、木材が流されたとかで大騒ぎしている。

8/2

大雨の後は幾分涼

高野名幸作さんの日記から



【44】

人通りも多い、目下、浜通りの貫通道路の工事をしている、明年の今頃は家も多く建っているのは確かだろう。

8/3

小樽に軍艦が入港したというので、見物に行く人もずいぶん多いという。

8/5

朝早く学校の高台まで行って見る、町中を眺めると大火後、新築の家がずいぶんと建っている、三山神社は関口さんの畑の方へ移転したので、

ら勇ましいラッパの音が聞こえる、七時半ころから軍服姿の軍人らが多く通る。

8/14

道路の関係で梅野の蔵を前に移動している、本では大工が四、五人来ていて、明日からいよいよ家の工事にかかるという。

8/15

美国の大謀からアバ縄、その他の附属を買いに来て八一〇円現金で売った、上首尾であった、本の普請用の木材が昼前に大はしけで着く、四〇〇五〇人で陸揚げしている。

8/16

朝早く海岸を散歩していると、帆船が五隻入港している、帆船が五隻入港している、火災後、古平へ来た木材は大量だろう、八時ころ、昨日売ったアバ縄などを取りに、美国から三半船に乗って一四、五人が来た、リング五八号、丸山町の宮古さんへ九〇〇斤(五四〇キロ)ほど売ることにした、一斤八銭。

8/20

ひと雨欲しいところだ、網、アバ縄が全部出てこれて倉ざらいだ、面白いほど売れた。

以下次号

北海道・樺太・千島を探険

最上徳内

蝦夷草紙

〈12〉

を読んでみましょう

ヲムシヤ という
蝦夷の儀礼のこと

天明五年(一七八五)、蝦夷地の国境いを検分する命をうけて東蝦夷地へ行ったことがあるが、蝦夷の習慣で※ヲムシヤというのがある。これは、役人にあいさつをするときの礼であるとされている。

蝦夷人の中には乙名(おとな)と小使(こづかい)という役があるが、内地での名主や組頭のようなもので、役人が来たときには、役所に向いて彼等が面会するのが土地の習慣である。そのとき、役人からは内地の土産が与えられ、酒が振舞われる。

このときは、アッケシ(厚

岸やクナシリ(国後の乙名や小使ら数名が呼び出されるが、それらは、海岸百里ほどの範囲にある場所の主だった長老たちである。

松前にいる蝦夷人の通辞(通訳)に案内されて来たが、その服装を見ると下着は木の皮で織ったアツシで、上には領主から与えられたわが国の小袖や、中には赤地の蝦夷錦の陣羽織を着た者もいる。

通辞が先に立ち、大勢の者が互いに手を取り合い役人の前に出てお目見えをする。そして体を震わせるが、これは相手に対して恐れ入りますという礼儀なのである。また、背をこませて前に出るのは謙遜の礼の意味

で、このように礼を厚くして自分の席に着く。

そのあと蝦夷人たちはうやうやしく合掌し、役人にいざり寄つてその手を両手に拝むようにとり、自分の胸にすりつけて再度拝み、その手で髪の毛をなで、ひげをなでて感服した様子で「あゝ、あゝ」と初めて声を出す。下がってから、「むゝゝ」とぬかずきながらまた再拝するが、これは相手に対する誉れ高い礼儀なのである。

盃(さかずき)で酒を賜わると、台と共に持つて再拝し、木を細長いへらのように削ったものを持つて、天地、海山、火や水の神々を拝み、そのへらのようなものを使つて、鼻の下のひげをすくい上げるようにして飲む。

それまで緊張していた座も、だんだん酔いがまわつてくると賑やかになつて来るが、これも和を尊ぶ礼なのである。このとき土産として、役人から米・こうじ・酒・たばこなどが与えられるが、こ

れらがありがたく頂き、礼を述べるのがヲムシヤの儀式なのである。

【注】ヲムシヤⅡ ヲムシヤというのは蝦夷語のウムシヤのなまったもので、ウⅡ互いに、ムシヤⅡ撫でさする、からきているという。すなわち、蝦夷が久しぶりで逢つたとき互いに体を撫で合つて、無事を喜び合う礼であつたわけである。

その後、松前藩が各地に場所を開き、その知行主が蝦夷との友好関係を保つために、年に一度、介抱と称して蝦夷の欲しがるものを船に積んで自分の場所に行き、ヲムシヤをおこなつて友好の証として土産を贈り、蝦夷もまた、友好のために土地の産物を返した。

初めはこうした友好的な儀礼から始まつたが、次第にヲムシヤは知行主が蝦夷に恩恵をほどこしたり、規則や命令を伝えるための支配的な儀式へと変わつていつてしまつた。(次号へ続く)

吉平町岬短歌会七月詠草

妹と吾れを待たしめ泳ぎゆき雲丹採りくれし兄今は亡し

池田 テル

公園の築山をタンポポ黄に染めてブランコに揺れる親子ほほ

櫛 佳代

あまし

春の花終えて淋しと見る庭につめ切り草萌ゆ蕾もたげて

鈴木 時子

十の字に切れ目を入れし椎茸を熱湯に放すに香り漂う

竹内 コト

それぞれの生き方語り同期会年を重ねて会える楽しさ

田中 香苗

雨つづき雑草生えし野菜畑玩具の如き雨蛙とぶ

東 美知

さやさやと風の音やさし木陰みち緑の光を浴びつつ歩む

堀 典子

お祭の渡御行列四十九年未だ見ざりき裏仕事して

山口 スエ

吉平町ホトトギス会

炎天の赤信号に待たさるる 斉藤 波留

山車止る何時もの人の音頭取り 山口 悦子

猿田彦祭火高く空こがす 越野敏雄

西積丹こゝも日本海鳥賊灯寄る 大和田絵伊

枝張って西日程よき居間の窓 福井幸平

地下足袋のほのかにおへる初夏となり 関口勝志

夏雲や旅を約せしこと言わず よしざきり

絵手紙の葱のにおいも届ききし 仲谷比呂古

蟬時雨また蟬時雨浪光る 越野清治

雨蛙夫との会話ふととぎれ 室谷弘子

春眠や寝てばかりゐる老ホーム 山口 浪

鯨来ぬいまも火渡り神輿かな 中村樺宵

〜編輯生太様宛ての詠草〜

した。慣れない土地での生活

▽春先は割と高温でしたが、ご健勝で過ごされることを祈

このところ何かすつきりしいな 念いたします。また、ユニーク

い天氣が続いています。体調 な川柳で話題の石井愛子さんが

の方はいかがでしょうか。こ 暫く休まれるとのこと、早い

の反動で残暑がきついのでは 復帰を期待しております。

と、つい考えたりします。 ▽今月号の編集が、いつもと違

▽平成六年から心の温まるよ ってちよつとちぐはぐになつて

うな原稿を寄せてくださった しまいました。ご了承下さい。

渡辺はつえさんが、息子さん ▽暦では早くも八月は立秋、

のおられる千葉県に行かれま 海の賑いもあとわずかです。